

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト 2023
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「ふしぎ」 オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1. 『薔薇色の脚 中川多理人形作品集』
中川多理／人形・写真 ス튜디오・パラボリカ
2023

◆吉田良の主催するドールスペースピグマリオン出身の人形作家、中川多理の作品集。写真集としては、おそらくこれが4冊目。それも幻想文学作家、山尾悠子とのコラボ的な本でもある。本書の巻頭の「語り」は山尾悠子、エッセイを寄せているのが、清水義典、川野芽生、そして金原瑞人。

2. 『ポエトリー・ドッグス』
斉藤倫／著 講談社 2022

◆男が立ち寄ったバーのバーテンというか、マスターは犬だった。ここではお酒も出すが、詩も出している。じゃ、「なにか、ぼくに、あいそうな詩を」というと、古今東西のいろんな詩が出てくる。そんなふうにして、男は何度かその店に寄って、マスターとあれこれ話すことになる。エンディングが素晴らしい。

5. 『are you listening? アー・ユー・リスニング?』
ティリー・ウォルデン／作 三辺律子／訳
トゥーヴァージンズ 2023

3. 『イノチ ノ ウチガワ ——X線写真で見る
生き物の世界——』
ヤン・パウル・スクッテン／文
アリー・ファン・ト・リート／写真
野坂悦子、薬袋洋子／訳

◆副題にもある通り、アンコウやタツノオトシゴ、ワニやニシキヘビ、カケスやカモ、コウモリやモグラなどのX線写真集。淡い色彩が見事で、一枚一枚がそのままアートになっている。そして、写真に添えられた文章が、それぞれの生物の骨的な特徴を見事に捉えているうえに、ユーモラスで詩的なのだ。

4. 『ペピーク・ストジェハの大冒険』
パヴェル・チェフ／著
ジャン＝ガスパール・パーレニーチェク、高松美織／訳
サウザンブックス社 2023

◆青、青、青のグラフィックノベル。いじめられてばかりの男の子が青い石を拾い、青い本を手に入れ、転校してきた青い目の少女に出会う。そしてその女の子を救うために、大波の逆巻く青い海を乗り越え、巨大な古木がからみあう青い森を抜けて、目的地の灯台へ。じつにストレートなファンタジーがダイナミックに展開する。

選者コメント

◆18歳の家出少女と、働きすぎて抜け殻のようになった27歳の車の整備工の女性。ふたりは車でテキサス州を走るうち不思議な猫を拾ったことがきっかけで、不気味な連中に追いかけるようになるものの、次第に相手を思う気持が芽生えてくる。ファンタスティックな要素がダイナミックな絵と色で美しく映し出されるところが見事。

選者：東雅夫氏
(アンソロジスト・文芸評論家)



1. 『アナベル・リイ』

小池真理子／著 KADOKAWA 2022

◆イケメン男に恋焦がれたあげく、命を落とした若い娘が、男に慕い寄る女たちを、次々と取り殺してゆく……不条理な死者の怨念が、測測と身に迫る、迫真のモダンホラー。

2. 『陽だまりの果て』

大濱普美子／著 国書刊行会 2022

◆今年度の泉鏡花文学賞に輝いた気鋭の力作短篇集。「老い」らくの果て、刻々と身に迫る「死」の刻限……これは「老年」と「幻想文学」というテーマに、作者が正面切って取り組んだ、画期的な一冊だろう。

3. 『吉祥院本「稲生物怪録」——怪異譚の深層への廻廊』

杉本好伸／著 三弥井書店 2022

◆近年、専門の「妖怪博物館」まで開設されて、一躍、全国区の知名度を得た、広島県三次市の妖怪談「稲生物怪録」。しかし、その原文を仔細に検証すると、謎めいた箇所や、非合理的な事実が次々明らかに……練達の国文学者が、謎の解明にいとむ興味尽きない一冊。

4. 『岡本綺堂 怪談文芸名作集』

岡本綺堂／著 東雅夫／編 双葉社 2022

◆昨年は、怪談の名手として知られた作家・岡本綺堂の生誕150年のメモリアル・イヤーだった。名著『近代異妖篇』を中心に、代表的な綺堂怪談を収めた本書は、最適な入門書となることだろう。同時代の挿絵入り！

5. 『日本鬼文学名作選』

東雅夫／編 創元推理文庫 2022

◆今年の創元推理文庫は、「鬼」と「吸血鬼」という東西の怪奇スターの、妖艶なる競演となった。とりわけ本書は、加門七海による『平家物語』『剣巻』の全文現代語訳を収める貴重な一冊となった。

リストのタイトル
10冊は、田原市図書館で
所蔵しています。

2023.10 作成